

微妙な均衡の上にドラマが生まれる

高校野球、百年のナゾ

「甲子園が夏の風物詩として愛される理由とは？」
「『高野連』って何をしているの？」
「そもそも野球って、どんなスポーツ？」
高校野球を高校野球たらしめるさまざまな理由を、
経済学者の中島隆信さんに聞いた。

慶應義塾大学商学部教授

中島隆信

●なかじま・たかのぶ 1960年神奈川県生まれ。専門領域は経済学の実証分析。『高校野球の経済学』『大相撲の経済学』『お寺の経済学』（東洋経済新報社）など、著作多数。

非効率かつ不確実！?

——『大相撲の経済学』や『お寺の経済学』など、身近なものを通して経済学の役割や面白さを明らかにしていく本をたくさん書いていらつしやいます。『高校野球の経済学』執筆のきっかけは何だったのでしょうか。

二つ理由があつて、一つは息子が高校で硬式野球をやっていたので、甲子園の地方大会を見に行く機会があつたんです。そこで、テレビでよく見るような、あの独特な応援風景を目の当たりにしたんですが、そのとき、一体何が高校野球を夏の風物詩として、こうして成り立たせているんだろうと疑問に思つたんですね。もう一つは、日頃から部活ばかり

やっていてゼミにはあまり入らないはずの大学の野球部員が、僕のゼミに入ってきたうえに、卒論のテーマで高校野球をやつてみたいと言ひ出して。それで相談に乗りながらいろいろ聞いてみたところ、高校野球というのはかなり特殊な世界であるということがわかってきた。そもそも野球って、あまり効率的なスポーツじゃないんです。高校球

児は、それこそ膨大な時間と労力を練習につき込んでいるわけですが、試合となると大変なのはピッチャーくらいで、攻撃では打者以外は大体がベンチに座っているだけだし、守備のときでも打球が飛んでこない限りそれほど動くことはない。しかも、高校野球は一試合二時間程度、これがプロだと平気で三、四時間もかかる。いずれにしても、試合にこれだけ時間を費やすスポーツは、ほかではほとんど考えられません。それを、サッカーグラウンドの二倍以上の球場を使ってやるんですから、必要なリソースのわりにはどう考えても非効率です。

おまけに、野球では一球一球に、ストライク、ボール、ファウル、ファアなどとジャッジがかかりますが、これはサッカーでいえば、パスごと「これはいいパス」「これは反則」

とジャッジしていくようなもので、審判が関わるごとに試合は止まってしまうんですから、これもやつぱり非効率。攻撃が有効かどうかを判断するのに電気審判器を導入したフェンシングのように、野球でもストライクゾーンの判定は機械に頼つたほうが正確だし、よっぽど効率的な気がしますが、それをやらずに、あくまで人間の力に頼っていること自体が非効率ともいえますね。

さらに、野球は不確実性の高いスポーツともいえます。審判への依存度が高いこともその一因ですが、野球の小さなボールは、天気やグラウンドの状況によってはかなり不規則にバウンドしたり、雨に濡ればエラーしやすくなる。

非効率かつ不確実であることが前提になっている競技——野球とはそういうスポーツでありながら、常に

根強い人気を誇り、甲子園にいたっては百年もの間続いている。それは一体なぜなのか？ その謎を解き明かすために書いたのが、『高校野球の経済学』なんです。

三つのバランスが大事

経済学では生産性を重視するので、なるべく少ないコストで効率的にアウトプットするにはどうしたらいいのかを考えます。こういう話を聞くのと、多くの人は「なるほど、合理的だな」と思うけど、でも、別に感動したりはしませんよね(笑)。

結局人間は、理不尽で、不条理で、非合理的なことに感動するもので、野球が持っている非効率性や不確実性こそが、実はそうしたドラマをはらんでいるんです。だからこそ、うまく演出できれば人を感動させるこ